

で半ヶ年の寄書欄を見るとあまり振は無い、が前、前々に較べると進境がある、注目すべきは後半期である、北斗さんや榎の人さん、どしどし研究した新らしい事を聞かして下さい。(完)

一八の花

神奈川 山上 霞 峯

小雨降る日！ 川合通ひのがた馬車の通る齋藤分の町はずれ、雨に濡れしの色を九ツ切にスケッチし初める、近所に泥いたづらをし居た小供等が直ぐ集つてくる、肥料車を引いた田舎の人迄も車をとめて見る(是は……なんですか皆!!!輸出になるのですか)と突然問ひ懸ける人が有る、自分は面白い馬が出来た時故唯(いゝ)と答う(へエ内地でも賣れますか)と又煩さく問ひかける、自分は初めて振返つて見ると四十位な商人體な人だ(僕は賣りやあません)と輸出畫に見られたり賣り畫と見られた腹いせにそつげなく答へると、其人も氣まわりが悪くなつたと見へていつか居なくなつた、雨はいつしか止んで、初夏の暖い光りが雲間から洩れて彼方の草家の家根の上に咲いて居る一八の花の色が冴へた。

無題 録

葵 沼 猛

水繪で人物を描く人は甚だ少ない、水彩畫家とならんとするもの皆風景畫さい研究すれば充分であると思ふて、人體を研究して其の奥儀を極めたる人は甚だ少數である、何にしる皆無と

云ふても過言ではあるまいと思ふ、先づ文部省展覽會や、白馬會、太平洋畫會の展覽會等へ往つて見るに、水彩畫の肖像畫出品の少ないのが實に遺憾な譯である、勿論水繪で人物を畫くと云ふのは中々六かしい事である、油繪で何んでもないお茶の粉の處が水彩では一寸出来ない場合が幾らもある、余も『みつゑ』を購讀する以前は木炭と油繪で斯究して居たから多少話せるのだ、水繪の六かしいと云ふ處は調子が思ふ通り出来ないのと、骨格を完全に描く事の困難なる事である、しかし研究次第次第で出来ない事はない筈である、昨秋の文部省展覽會出品中夏目七策氏の「農夫」等は敬服の至りである、又今春太平洋畫會へ出品されたやはり同氏の作「お稽古」等も、思切つて生々した色が使つてあるので之れも面白く拜見した、全く大下先生のお話の通り、夏目氏は人物に妙を得て居られる様だ、否な研究の程は多謝する次第である、余も現時大に死力を盡して研究して居る、何にしる繪畫は自由藝術美であつて、あらゆる自然美は寫して以て藝術美をなし得るので、只畫家その人の手腕巧拙如何によつて美の程度を異なるのみであから、自然美を寫さんとする諸兄弟には面倒なる理屈は無用だ、只自然を愛する一念と、何處までも忠實に觀察して趣味のある自然美を表現する事が肝要であると思ふ、口先ばかりの鼓學者ならいざ知らず藝術はどこまでも神聖であるから、自然を愛する諸兄弟よ、技に優れたといふ大野心を以て何處までも眞面目に研究されん事を希望して終を告ぐ。